〔1146〕

氏名（生年月日）	石川茜恵（イシカワアカネ）（1986年2月26日）
学位の種類	博士（心理学）
学位記番号	文博甲第99号
学位授与の日付	2015年3月19日
学位授与の要件	中央大学学位規則第4条第1項
学位論文題目	**青年期における時間的展望** **―現在を起点とした過去のとらえ方からみた未来への展望―**
論文審査委員	主査　都筑　学
	副査　山科　満・白井　利明（大阪教育大学教育学部教授）

内容の要旨及び審査の結果の要旨

1. 本論文の要旨

従来の時間的展望研究は，青年がどのような未来への展望をもっているかを検討したものが多く，青年の現在・過去・未来の間にいかなる連関過程が存在し，青年がそれらをどのように統合しているのかは，ほとんど実証的に検討されてこなかった．

本論文は，上記のような課題を明らかするために，これまで見過ごされることが多かった青年の過去のとらえ方に注目し，現在・過去・未来をセットとした枠組みを用いて，現在と過去との関連性，過去から現在を通した未来という関連性を軸に，現在・過去・未来の連関過程を実証的に検討しようとしたものである．

具体的な研究課題として，①過去の複数の側面を測定するための尺度，および，現在と過去の関連や現在と未来の関連を測定する尺度を新たに開発する，②青年が置かれている現在の状況によって，過去のとらえ方がどのように規定され，そうした過去のとらえ方によって未来への展望がいかに異なってくるかを明らかにする，③縦断的方法を用いて，時間の推移にしたがって現在・過去・未来の関連性がいかに変化するかを明らかにする，という3つを設定した．

以上のような問題意識と研究の構想（第1・2章）にもとづいて，青年期における時間的展望を検討するために，約1,400人の大学生を対象にして，2009年～2014年にかけて13の調査（第3～7章）が実施された．

第3章では，青年が過去をどのようにとらえているのかという「過去のとらえ方」を複数の側面から測定できる尺度と，過去と現在，現在と未来の関連をどのように意味づけているのかという「時間的関連性」を測定するための尺度の2つを開発し，信頼性と妥当性を検討した．

第4章では，現在が過去をどう規定するかを明らかにするために，前章で開発された過去のとらえ方尺度を用いて，現在の時点における充実感．空虚感の程度や大学生活のすごし方のタイプによって，過去のとらえ方がどのように異なるのかを検討した．

第 5 章では，過去が未来への展望をどう規定するかを明らかにするために，過去のとらえ方のタイプによって，自己形成意識や目標意識，目標・手段の計画・実行がどのように異なるかを検討した．

第 6 章では，現在・過去・未来の連関過程の各部分を明らかにするために，展望地図法（園田，2011）にもとづく面接調査から得られた発話内容と充実感との関係の分析や第 3 章で開発された時間的関連性尺度から得られた「現在と過去との関連づけ」と「現在と未来との関連づけ」との関係の分析にもとづく検討がなされた．

第 7 章では，現在・過去・未来の連関過程の全体像を明らかにするために，展望地図法と面接法を組み合わせ，短期縦断調査をおこなうことによって，調査者に対して展望地図の内容を語るということを通じて，時間的展望がどのように変化するかを検討した．

第 8 章では，13 の実証研究の成果がまとめられ，設定された 3 つの研究課題と対応させながら本研究の成果が論じられた後に，青年における時間的展望の現在・過去・未来の連関過程のモデルが提示された．最後に，今後の課題と結論が述べられた．

2. 本論文の構成と概要

本論文は，以下のような全 8 章から構成されており，図 1 のようにまとめられる．

第 1 章　問題提起
　第 1 節　青年における未来への見通しのなさと不安
　第 2 節　青年期における時間的展望研究の流れと不足点
　第 3 節　青年における未来を過去からとらえる必要性
第 2 章　青年期における時間的展望研究の概観
　第 1 節　青年期における未来への展望が現在の行動に与える影響
　第 2 節　過去のとらえ方からみた未来への展望
　第 3 節　研究の到達点と本研究の目的
第 3 章　尺度の開発
　第 1 節　過去のとらえ方尺度の開発（調査 1，調査 2）
　第 2 節　時間的関連性尺度の開発（調査 3，調査 4）
　第 3 節　本章のまとめ
第 4 章　現在の状況によって規定される過去のとらえ方
　第 1 節　現在における充実感の程度による過去のとらえ方の違い（調査 5）
　第 2 節　現在における空虚感の程度による過去のとらえ方の違い（調査 6）
　第 3 節　現在の大学生活の過ごし方タイプによる過去のとらえ方の違い（調査 7）
　第 4 節　本章のまとめ
第 5 章　過去のとらえ方が未来への展望に与える影響

第 1 節　過去のとらえ方タイプによる自己形成意識の違い（調査 8）
第 2 節　過去のとらえ方タイプによる目標意識の違い（調査 9）
第 3 節　過去のとらえ方タイプによる目標 - 手段関係の違い（調査 10）
第 4 節　本章のまとめ
第 6 章　時間的関連性による現在，過去，未来の連関過程の検討
第 1 節　現在の充実感の程度による時間的関連性の違い：面接法を用いた検討（調査 11）
第 2 節　時間的関連性が現在における行動に与える影響（調査 12）
第 3 節　本章のまとめ
第 7 章　過去，現在，未来の語り方による時間的展望の変化
第 1 節　過去，現在，未来の関連づけ方による時間的展望の変化：展望地図法と面接法を組み合わせた短期縦断調査（調査 13）
第 2 節　本章のまとめ
第 8 章　討論および結論
第 1 節　本研究で得られた知見
第 2 節　成果と討論
第 3 節　結論

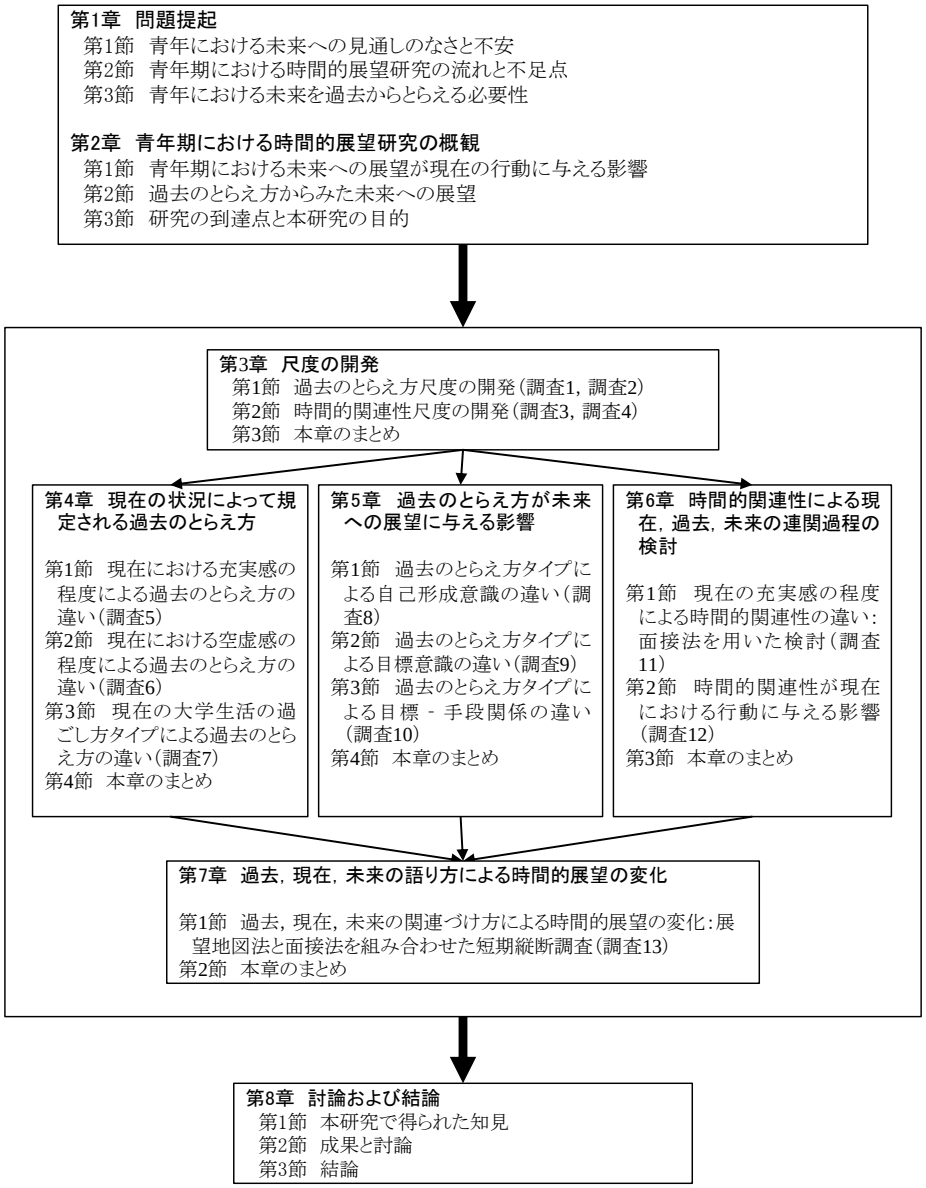

図 1　本論文の構成

第 1 章では，時間的展望研究のあり方に対する問題提起と本研究における基本的な研究の枠組みが論じられた．第 1 節では，現代青年が置かれている社会的な状況が整理され，青年が未来に対して不安を抱いている様子が示された．第 2 節では，時間的展望研究を概観し，青年期の未来を重視しながら進められてきた研究の問題点が指摘された．第 3 節では，青年期における時間的展望について，未来という点からだけではなく，現在や過去も含めて取り上げて検討することの必要性が示

された．

第 2 章では，青年期を対象とした時間的展望を概観して，研究の到達点を明らかにした上で本研究の目的が述べられた．第 1 節では，従来の研究知見を概観し，青年期の時間的展望の特徴を明らかにした．第 2 節では，過去のとらえ方を基軸とした上で，過去のとらえ方によって未来への展望がどのように異なっているのか，現在の状況によって過去のとらえ方がどのように規定されるのか，現在・過去・未来という 3 つの時間の連関過程についてのどのように検討されてきたのか，という点から先行研究の到達点を示した．第 3 節では，青年期の時間的展望研究の到達点にもとづいて，本研究の 3 つの目的が示された．第 1 は，過去のとらえ方を複数の側面から測定する尺度，および，現在と過去の関連や現在と未来の関連を測定する尺度を新たに開発することである．第 2 は，青年が置かれている現在の状況によって，過去のとらえ方がどのように規定され，そうした過去のとらえ方によって未来への展望がいかに異なってくるかを明らかにすることである．第 3 は，縦断的方法を用いて，時間の推移にしたがって現在・過去・未来の関連性がいかに変化するかを明らかにすることである．

第 3 章では，次章以降で用いられる新たな 2 つの尺度の開発がおこなわれた．第 1 節では，過去のとらえ方尺度の開発を目的として，2 つの調査がおこなわれた．調査 1 では，過去のとらえ方に関する自由記述調査にもとづき，過去のとらえ方の予備尺度 94 項目が作成された．次に，調査 2 では，質問紙調査から得られたデータにもとづく因子分析の結果，「連続的とらえ」「否定的態度」「受容的態度」「わりきり態度」「否定的認識」の 5 下位尺度からなる過去のとらえ方尺度が作成され，十分な信頼性と妥当性が確認された．第 2 節では，過去と現在，現在と未来の関連をどのように意味づけているのかという「時間的関連性」を測定するための尺度の開発を目的として，2 つの調査がおこなわれた．調査 3 では，過去，現在，未来を可視化させた展望地図にもとづいた面接調査を実施し，発話内容を分類した結果，「変化の軸」と「肯定性の軸」によって青年の現在と過去，現在と未来の関連を把握できることが示された．分類結果にもとづき，時間的関連性予備尺度（過去－現在関連性尺度および現在－未来関連性尺度 20 項目ずつ）が作成された．調査 4 では，質問紙調査から得られたデータにもとづく 2 つの時間的関連性予備尺度に関する別々の因子分析の結果，「変化への肯定的評価」「変わらないことへの肯定的評価」「変化への否定的評価」「変わらないことへの否定的評価」の 4 下位尺度からなる過去－現在関連性尺度と，「改善への希望」「一貫性の希望」「否定的一貫性の予測」の 3 下位尺度からなる現在－未来関連性尺度が作成され，十分な信頼性と妥当性が確認された．

第 4 章では，第 3 章第 1 節で開発された過去のとらえ方尺度を用いて，大学生の現在という時点での生活感情や生活のすごし方によって，過去のとらえ方がどのように規定されるのかを明らかにするために，3 つの質問紙調査がおこなわれた．第 1 節では，現在における正の生活感情としての充実感の高群は，低群や中群よりも過去を現在や未来と連続しているものとしてとらえ，充実感の低群は中群や高群よりも過去に対して否定的な態度であることがわかった．第 2 節では，現在における負の生活感情である空虚感の高群は中群や低群よりも過去に対する否定的態度や否定的認識が

強く，空虚感の低群は中群や高群よりも過去を現在や未来と連続したものとみなす連続的なとらえが強いことがわかった．第3節では，現在における大学生活の過ごし方の3つのタイプ（活動低群，交際群，娯楽群）の中で，大学生活を活動的に過ごしていない活動群は，異性の友人と多くの時間を過ごす交際群よりも，過去についての否定的認識が強いことがわかった．

第5章では，過去のとらえ方タイプによって，未来への展望がどのように異なるのかを明らかにするために，3つの調査がおこなわれた．第1節（調査8）では，過去のとらえ方の5下位尺度得点を用いてk-means法による非階層クラスタ分析をおこない，調査協力者を分類した結果，葛藤群，肯定群，無関心群，不安定群，統合群，とらわれ群の6タイプが得られた．次に，過去のとらえ方6タイプによる自己形成意識の差異を検討した．過去に対するとらえ方の肯定群，統合群，不安定群は無関心群，とらわれ群よりも自己形成意識の得点が高かった．葛藤群はとらわれ群よりも自己形成意識が高く，統合群よりも低かった．第2節（調査9）では，調査8で得られた各群の中心値を基準として，調査協力者の分類をおこない，同じ特徴を持つ6タイプに分類可能であった．次に，過去のとらえ方6タイプによる「将来への希望」「将来目標の有無」の差異を検討した．その結果，肯定的群，統合群は，葛藤群，無関心群，とらわれ群よりも将来への希望が強かった．葛藤群，統合群は無関心群，とらわれ群よりも将来の目標を多く持っていた．第3節（調査10）では，調査8で得られた各群の中心値を基準として，調査協力者の分類をおこない，同じ特徴を持つ6タイプに分類可能であった．次に，過去のとらえ方6タイプによる目標‐手段関係の差異を検討した．その結果，どの群でも，職業に関する目標が一番重要な目標として上げられていた．統合群は無関心群よりも目標を多く持っていた．肯定群では，目標を達成しようと実行していることや実行しようと考えていることが比較的具体的だった．

第6章では，時間的関連性という点から，現在・過去・未来の連関過程を検討することを目的として2つの調査がおこなわれた．第1節（調査11）では，作成された展望地図法の結果にもとづく面接調査の発話内容の分析から，充実感の高群は低群よりも，過去から現在の関連性をポジティブに意味づけて話すことが多く，ネガティブに意味づけて話すことが少ないことが明らかになった．第2節（調査12）では，第3章第2節で作成された時間的関連性尺度の得点にもとづき，過去から現在の関連性が，現在から未来の関連性に影響を与え，現在から未来の関連性が現在の行動を動機づけるというモデルを作成し，共分散構造分析によるパス解析によって検討したところ，高い適合度が得られ，モデルの妥当性が示された．過去から現在にかけての変化への肯定や過去から現在までの肯定的一貫性は，現在から未来への改善の希望や一貫性の希望を高めていた．現在から未来への一貫性の希望は，自己目標指向性にかかわる活動，充実感と自己受容にかかわる活動，および現在の時間の使い方の評価を高めていた．

第7章では，時間的展望における現在・過去・未来の連関過程を明らかにすることを目的として，展望地図法と面接法を組み合わせて，1ヶ月半ほどの間隔で2回の調査（Wave1集団調査とWave2個別面接調査）を縦断的におこなった．この縦断的調査（調査13）では，2回の調査時点での時間的展望（将来への希望，将来目標の有無，空虚感）と過去のとらえ方（5下位尺度）の得

点の変化が検討された．展望地図法の発話内容にもとづいて，過去と現在の関連性のポジティブ群とネガティブ群に分類したところ，関連性ポジティブ群はネガティブ群よりも，わりきり態度の得点が高く，空虚感の得点が低かった．Wave1 から Wave2 にかけて，将来目標の有無，将来への希望，連続的なとらえの得点は増加し，逆に，空虚感と否定的態度の得点は減少した．2 つの群から 2 名ずつの事例分析をおこなったところ，展望地図の内容について，他者に理解できるように過去，現在，未来のつながりを語ることを通して，自分の変化，あるいは一貫性に気づいたり，その理由を解釈していていることがわかった．

第 8 章では，第 3 ～ 7 章の実証的な研究から得られた知見をまとめた上で，第 2 章で述べられた 3 つの目的に即して総合的な考察がおこなわれた．

第 1 は，新たな尺度の開発に関してである．青年期における過去のとらえ方を測定する尺度を新しく作成したことによって，従来は一次元的にしかとらえられてこなかった時間的展望の過去の側面について，複数の側面から多面的にとらえることが可能になり，過去のとらえ方には異なる展望をもつタイプが存在することを明らかにすることができた．また，時間的関連性（過去－現在関連性，現在－未来関連性）の尺度を新たに作成したことによって，現在と過去の関連づけや現在と未来の関連づけという時間的展望の内容的側面を測定することができるようになった．

第 2 は，現在・過去・未来の連関過程から青年の時間的展望をとらえたという点である．第 4 ～ 6 章の研究から，現在の状況によって過去のとらえ方が規定され，過去のとらえ方によって，未来への展望が異なる点が明らかにされた．さらに，現在の状況によって過去と現在をどう意味づけるかが規定され，過去から現在までをどう意味づけるかが，現在から未来への意識に影響を与え，さらに現在から未来への意識が行動を動機づけている点が明らかにされた．それらの知見を統合すると，次のような 2 つのタイプが考えられる．タイプ 1 は，現在において充実した活動をおこなっている青年，目標を持っていて空虚感が低い青年である．このタイプは，充実した現在と連続するようなものとして過去をとらえ，過去から現在にかけて変化した自分や変わらない自分を肯定的に評価し，目標や自己形成を目指して未来を展望する．それとは反対に，タイプ 2 は，充実感を持てる活動をおこなっていない青年，空虚感を感じている青年である．このタイプは，過去をネガティブなものとして見たり，過去を後悔したり拒否したりするような否定的態度を持ち，過去から現在にかけての自分の変化を否定的に評価し，変わってこなかった自分をネガティブに感じているが，こうしたタイプでも目標や自己形成という点で未来への展望を持つことがある．この 2 つのタイプの青年は，同じように未来への展望を持っていても，現在と過去の関連性や現在と未来との関連性という現在・過去･未来の連関過程という文脈が異なっている．今後は，このような点を考慮することによって，青年の時間的展望における質的な差異を明らかにすることができるであろう．

第 3 は，短期縦断的調査によって，時間的展望の変化をとらえたという点である．展望地図法で表現された自分の過去・現在・未来，および現在と過去との関連性や現在と未来との関連性をインタビューアーに対して語ることを通して，現在とつながっている過去や現在から向かっていく未来の意味についての理解が深まっていく．時間的展望の変化に及ぼす他者の役割や意義が明らかにな

ったと考えられる．

実証的な知見を総合して，青年の時間的展望における現在・過去・未来の連関過程についてのモデル（図 2）が示された．

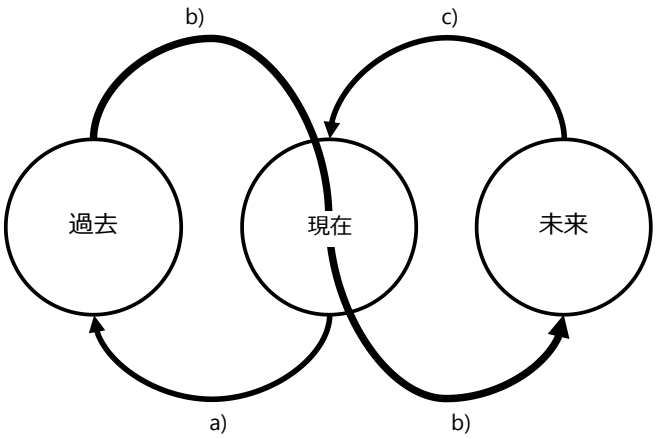

図 2　青年期における時間的展望の現在・過去・未来の連関過程

a）は，現在の状況が過去のとらえ方を規定する側面を示している．b）は，過去のとらえ方が未来への展望に影響を与える側面を示している．b）はもう一つ，次の流れを示している．過去から現在までの関連性をポジティブに意味づけた場合，現在から未来への関連性にポジティブな影響を与えるという流れである．さらに b）から c）につながり，c）はポジティブな現在－未来関連性は現在の行動にポジティブな影響を与えるという流れを示している．

これらを総合すると，時間的展望における現在・過去・未来の連関過程は次のように考えられる．個人は現在という時点を起点として過去，現在，未来を関連づけるという活動をおこなっている．その活動は現在の状況によって規定され，他者に対して現在，過去，未来を表現することで，時間的展望は変化し，明確になる可能性がある．その変化は，次のようなものであると考えられる．第 1 に，現在という時点において過去に対する受容的な態度に変化が起こり，また過去と現在の関連に対する意味づけが変わるとき，未来への展望が変化する．第 2 に，未来への展望が変化すると，現在における行動が変化する．第 3 に，変化した行動にともなって生じる生活感情や過去のとらえ方が規定される．以上のような現在，過去，未来の連関過程を繰り返しながら，時間的展望は変化し，発達していくと考えられる．

以上のような総合的な考察の後に，今後の課題が最後にまとめて示された．

3. 本論文の評価

本論文は，青年期の時間的展望について，現在・過去・未来の連関過程という視点から検討したものである．本論文は，先行研究の綿密な検討にもとづいて，13 にも及ぶ質問紙調査と面接調査を積み重ね，青年の時間的展望の特徴を実証的に明らかにし，時間的展望の研究分野に新しい知見をもたらしたという点で，高く評価できる．本論文の独自性をまとめると，以下の 3 点に集約される．

(1) 本論文では，過去のとらえ方尺度と時間的関連性尺度という新しい尺度を独自に開発したことによって，青年の時間的展望の様相をリアルにとらえることができた．過去・現在・未来を円で描画させるサークル・テストのような従来の研究手法では，現在・過去・未来の相互の関係性を限定的にしか理解できなかった．それに対して，本論文では，現在から見た過去については，とらえ・態度・認識という 3 つの異なる次元から把握できるようになり，現在と過去の関連性や現在と未来との関連性については，変化と肯定性の 2 つの軸の組み合わせで把握できるようになった．過去のとらえ方にも肯定群，統合群，葛藤群，不安定群，とらわれ群，無関心群という異なるタイプが存在し，それぞれが固有の未来への展望を持つことを明らかにした．現在と過去の関連性，現在と未来の関連性，および現在の状況についての因果関係の検討からは，現在と過去と未来との相互の影響関係が存在することを明らかにした．このように本論文は，青年の時間的展望の特質に関して新しい知見を付け加えた．

(2) 本論文では，時間的展望における過去の重要性に着目して実証的研究を進めることによって，これまでの時間的展望の研究の枠組みを拡張することができた．従来の時間的展望研究においては，青年にとって未来の持っている意味が強調されることが多かった．未来志向と過去志向が対立的にとらえられ，過去志向の青年は未来への展望を持てない後ろ向きの青年としてみなされてきた．本論文は，そうした過去と未来とを二者択一的にとらえる見方を超えて，現在から過去を振り返り，それを土台としながら，未来を展望していくという一連の過程として時間的展望の本質を考えようとした．これまでの時間的展望研究では，十分な検討がおこなわれてこなかった過去というものを積極的に取り上げて，実証的に研究した．それらの研究知見を総合して，仮説的にではあるが，青年期の時間的展望の現在・過去・未来の連関過程のモデルを作り上げたことができた．このように本論文は，独自な研究視座を持っている．

(3) 本論文では，青年の時間的展望の実態にアプローチしていく新たな研究方法論を提示した．展望地図法と面接調査を組み合わせて短期縦断調査を実施し，①過去から現在，現在から未来という個人の中に存在している時間の流れと，②Wave1 から Wave2 までの間に存在する時間の流れという 2 つの時間経過の中で，青年の時間的展望の変化をとらえようとした．これまでの時間的展望研究では，同一の質問紙を同一個人に複数回実施する縦断調査はおこなわれてきており，研究の成果も一定程度蓄積されてきた．ただし，それらの研究から明らかにされてきたのは，複数の調査時点間における青年の時間的展望の変化であった．それに対して，本論文では，面接調査のプロトコールの分析から，個人の中に存在する過去から現在，現在から未来という時間の流れをとらえようとした．これらの点で，本研究は意義あるものと考えられる．

以上のように，本論文は青年の時間的展望に関する心理学的研究として高く評価できる一方で，次のような問題点も含まれている．

(1) 本論文では，過去のとらえ方尺度を用いて，過去の出来事一般について検討しているが，過去の出来事の個別具体的な内容が現在・過去・未来の連関過程に及ぼす影響について事例研究などを通じて解明していくことが望まれる．

(2) 本論文では，縦断的調査の人数が少なく，質問紙調査を含めて対象者が大学生に限られている，研究対象の人数を増やしたり，年齢範囲を広げて，得られた知見の一般性や信頼性・妥当性を高めていくことが求められる．

(3) 本論文では，社会的な要因が青年の時間的展望に及ぼす影響については検討されていない．そのときどきの社会状況は，青年の現在の状況や未来への展望に大きな影響力を持っており，社会的な観点を含んだ研究が今後望まれる．

ただし，上記の諸問題は，今後の研究によって明らかにされていくことが十分に期待される問題であり，本論文の独創性や学問的価値を損なうものではない．

以上を総合して，本審査委員会は，本論文を博士（心理学）の学位を授与するに値するものと認定する．